日本事情Ⅱ「多文化コミュニケーション入門」

大切な友と自分

教育文化学部　地域科学課程

G5　佐藤駿

◇目次◇

1.はじめに

2.インタビュー相手の決定理由

3.インタビュー

4.インタビューから

5.「日本事情Ⅱ」を振り返って

1. はじめに

自分がインタビューをする相手として選んだ相手は同じ学部・学科に所属している友人だ。その人とは大学で初めて出会い、今ではおそらく一番仲のいい友人の一人であると思う。そんな友人でも、自分は県内出身、友人は県外出身者であるので分からない・知らない部分もまだまだあると思った。それをこの機会にいろいろと知ることができたらと思い、彼をインタビュー相手に選んだ。

2. インタビュー相手の決定理由

自分がインタビュー相手に選んだ人は、同じ教育文化学部地域科学課程に所属している熊倉悠介さんである。熊倉さんは、この大学生活において一番信頼している大切な友人である。大学にいるときは大体の時間は彼と一緒に行動することが多く、大学以外でもよく遊んだりもしている。一人暮らしで、住んでいる場所も大学のすぐそばなので、しょっちゅう彼の家に遊びに行ったりもしている。しかし、それでもまだ分からないことがあるのではないかと考え、彼にインタビューをしてみようと思った。

なぜ仲良くなったのか、ということを話すべきなのだろうが、正直言ってなぜ仲良くなったのか、そのきっかけをよく覚えていない。いつの間にか仲良くなって、一緒に行動するようになっていた。そんな、知らず知らずのうちに仲良くなることができるところもまた、熊倉さんの長所だと思う。

熊倉さんは、比較的誰でも気さくに話せる人で、内気な自分から見ると、非常にうらやましく思える。実際、初対面の人と会っても、どちらかと言えば引っ込み気味で話さない自分とは対照的に、熊倉さんは積極的に話しかけていた。これも彼の人をひきつける魅力的な部分と言える。

また自分は彼を非常に心のやさしい人だと思っている。これは毎日一緒にいればすぐに分かる。とても友達想いで、友人のことを本当に大切にしてくれているからである。それに彼は非常に涙もろい面を持っていて、ある講義でいろいろと映画を見ていた時、彼は感動して涙を流していた。素直に感動でき、素直に涙を流す姿を見たことで、そう思うようになった。

彼はあきらめるということをしない努力家でもある。彼と自分は同じ音楽サークルに所属していて、彼は今年の春からギターを始めた。同じバンドで出た初めてのライブでは、初めて1、2か月しか経ってないのに、見事に弾いていた。毎日の練習の結果では思う。今となっては春とは比べ物にならないくらいに上達している。おそらく講義が終わったあとも、家で黙々と練習していたのではないだろうか。これが、自分が彼を努力家であると考えた理由である。

上のことが熊倉さんをインタビュー相手に選んだ主な理由である。このようにたくさんの魅力を持っていると思われる熊倉さんをインタビュー相手に選んだのは、自分の中ではごく自然のことだったように思える。

インタビューではいろいろと聞いてみたいことがある。熊倉さんは県外出身者なので、

秋田の印象や、驚いたこと、困ること、などなどを聞いてみたいと思う。また、他にはこれからの大学生活での目標や、やってみたいことなども聞こうと思っている。今回のインタビューで、新しい熊倉さんを発見できたらと思っている。

3. インタビュー

12月12日（木）
熊倉宅にて。

佐藤駿（以下S）「それではインタビューを始めます（笑）」
熊倉悠介（以下K）「なんか照れるな…。」
非常にバツが悪そうである。
S「まぁ気楽に。」
K「了解。」

S「では、まず始めに、なぜ秋田に？」
K「まぁ…センター試験の関係で…。それ以上は聞くな。察しろ。」
S「う…うん。失礼しました…。」
とりあえず秋田大学が第一志望だったわけではなさそうである。

S「んじゃ次。秋田に実際来る前に持ってた秋田県のイメージは？」
K「北国だからすごく寒そうっていうイメージが一番あったかな。」
S「冬は最高気温1℃とかは普通だからな。」
K「らしいね。さすがにストーブもないとツライ？」
S「ツライなんてもんじゃない、死ぬぞ。」
K「マジか!？」
非常に不安そうな顔をしていた。
少し脅しすぎたか。

S「それで、ほかにはなんかイメージとか持ってた？」
K「あとはなまはげとかきりたんぽかなぁ。」
S「まぁそんなとこだよな。むしろそれぐらいしかない。」
K「きりたんぽが有名だけど、普通の家庭で食べたりするの？」
S「冬は鍋とかでよく食べるかな。あとは味噌つけたみそたんぽとか。」
K「へぇ、いいねぇ。」
目が輝いている。

S「次。秋田のここがいいってところ、あったりする？」
K「秋田のいいところは…のどかなところかなぁ。」

S「それは何にもないって言いたいのか？」
K「いや！そういうわけじゃなくて！
ほら、自然がたくさんあるし、そういうところがね。」
S「そんなに動揺するなよ。あとある？」
K「そうだなぁ…雪がいい（笑）」
S「栃木は雪降んないのか？」
K「降ってもちょっとだね。」
S「ふぅん。まぁ一年秋田にいれば雪は嫌になる（笑）」
K「そんな降るの!?」
S「とりあえず道路の横断歩道は消える。」
K「なんか憂鬱になってきた…。」
表情が曇る。
しまった、また言いすぎたか。

S「では逆に、悪いところとかはある？」
K「店とか遊ぶところが少ないね。」
S「やっぱりのどかと関連するような…。」
K「気のせい（笑）」
S「でも確かに何もないよな。駅前とかフォーラスとか、そんなもんしかないもん。」
K「遊ぼうと思っても遊べない。」
S「遊ぼうと思ったら郊外行かなきゃ。御所野のイオンとか（笑）」
K「（笑）」
S「今度車出すから他にも誰か誘って行こうぜ。」
K「マジか!?俺ユニクロで買い物したいんだよね。新しい服が欲しい。」
S「まぁ無事に帰ってこれる保証はしないがな。」
K「えっ…？」
もうなんだか楽しくなってきた。
結構オシャレには気を使うようである。
自分とは大違いだ。
ちなみにこのインタビューの数日後、自分の車で御所野のイオンタウンへ。
熊倉さんはいろいろと服を買って満足そうだった。

S「じゃ次の質問。秋田に来てみてよかったと思う？」
K「そりゃよかったと思うよ。」
S「そいつはよかった。で、どうして？」
K「やっぱいろんな友達と出会えたし、みんないいやつばっかりだし…。」
S「お前ってやつは…（泣）」
K「泣くな（笑）
ちょっと寒くてつらいなぁって思うことはあるけど、地元と違う気候の土地で生活するってのはすごくいい経験になると思うしね。」

S「いいね、そのポジティブな考え。」
比較的前向きに物事をとらえる性格のようだ。

K「一人暮らしもいい経験だよ。」
S「一人暮らしで生きていける自信がない。」
K「いや、意外になんとかなってるもんだよ。」
S「ふーん。住んでる場所が近いのはいいよな。」
K「まあね。ただたまり場になってる。」
S「確かにな。滞在料請求しろ。一時間二百円とか（笑)」
K「そしたら大もうけだ（笑)」
そうとうたまり場になっているようだ。
若干困っているようだった。

S「それでは、将来の夢は？」
K「将来は…今のところ公務員かな…。」
S「へぇ、何で？」
K「生活が安定してるから？」
S「現実的だな。」
K「今の世の中だとね。」
S「やな世の中だ。」
お互い少し暗い気分になってしまった。
しかし、おぼろげながらも将来なりたいものを持てていることはいいことだとも思った。

S「若いんだから明るくいこう（笑)
それじゃこの大学生活で頑張りたいことは？」
K「勉強にサークルにバイト、大学生のうちにしか経験できないような活動を頑張っていきたいっす。」
S「忙しいな（笑)」
K「だな（笑)」
そういった熊倉さんは笑顔だった。

4. インタビューから

インタビューは普段会話をしているような雰囲気でできたので非常によかったと思う。大体は自分の予想していたのと同じだった。家が近くてたまり場になっていて彼も少し困っている、という話が出たが、それだけ彼を信頼している友人も多いということであると思う。また、少し困っているといいながらも、拒むことをしない彼の人の良さがうかがえる。その隔てなく誰ともでも打ち解けることができる熊倉さんに、自分は魅力を感じたんだと思う。また、インタビューをしていて気付いたことは、非常に素直な性格をしている

と思った。たまに冗談をとばしながらインタビューをしていたが、それに一喜一憂しながら反応していた。ただ素直すぎて、少しだまされやすい性格なのではないかと心配したが、そこもまた彼の長所であり、その素直で裏表のない性格が人を引き付けるのであると思う。最後の大学で頑張りたいことは何か、という質問の答えを聞いて感じたことだが、何事にも積極的に取り組む姿勢がみえる。どんなことでもなにかしら自分のプラスになると思ってやっている。これは前向きでポジティブな面にもつながっていると思う。そしてやるからには全力で、これは努力家な面にもつながっていくのではないか。

なぜ熊倉さんを魅力的だと感じたのか。それはおそらく、自分に持ってないものをたくさん持っているからだと思う。自分はどちらかというと内気で、面倒なことは避ける、あまり泣くということをしない、ネガティブ思考であるなど、彼とは反対の部分を持つところも多い。全てが全て正反対というわけではないが、そういった部分が多い。自分はそういった性格のままでいたいとはあまり思わない。できるならば何にでも挑戦し、素直で、前向きに楽しく生活したいと思う。つまり熊倉さんは、大袈裟ではあるが、自分の理想とも言えるのである。そんな彼を魅力的と感じたのは当然だったのかもしれない。

では熊倉さんはなぜ、自分と仲良くなってくれたのか。そのことを先日、思いきって本人に聞いてみた。すると彼は、

「う～ん、確かにいろいろ違うとこはあるけど、どこか似てると感じたからかな。なんだかんだで話も合うしね。」

と言っていた。

自分は、彼は自分にないところをたくさん持っていると思っていたが、そんな自分を彼は似ていると感じていたらしい。彼の自分に対する新たな見方を発見することができた。

5.「日本事情Ⅱ」を振り返って

正直に言ってこの授業は、初めは乗り気ではなかった。仲のいい友人が誰一人もいなかったし、またインタビューもしてもらうという話で、面倒なことはしたくない自分にとって苦痛だった。ただ、何回か回数を重ねるにつれて同じグループの人とも仲良くなることもできた。仲良くしてくれた同グループの方たちには本当に感謝している。こういったところでも、人間関係の大切さを確認することができた。留学生の方とも交流することができて、とても貴重な経験ができた。インタビューでも、友人の新たな面や考えを見つけることも出来たので本当によかったと思う。振り返ってみると、この授業をとったことに全く後悔はしていない。この授業で学んだことを今後に活かしていけたらと思う。

日本事情Ⅱ「多文化コミュニケーション入門」

「友人との会話による印象の変化」

目次

1、はじめに

2、インタビュー相手の決定と理由

3、インタビューの計画

4、インタビュー結果

5、インタビューから浮かぶイメージ

6、インタビューをしてみての感想

7、日本事情Ⅱを振り返って

加賀美　開

１、　はじめに

私はインタビューする対象として学科での友人や同じ部活動に所属する友人にインタビューしてみたいと思いました。大学に入学してから知り合ったばかりでまだ知らない部分も多く、さらに私は秋田県出身なので県外からきた友人に話を聞くことで新しい発見があると思ったからです。共通する部分と全く違う一面をもつ相手なのでインタビュー対象として選ぼうと思いました。部活ならテニスをしているという共通点、同じ学科なら将来の目標がおなじであるということがあげられます。

２、　インタビュー相手の決定と理由

［インタビュー相手の決定］

私がインタビュー相手に選んだのは、同じテニス部に所属する山田辰太郎さんです。山田さんは秋田大学の工学資源学部生命科学科で私と学部学科は全く異なっています。山田さんは福島県出身で私は秋田出身なので、共通点といえばテニスをやっているということくらいです。しかし不思議と気があう様に思えます。4 月に出会ってから半年以上山田さんと接してきましたがよくわからない部分も多々あります。そういった点でも今回インタビューしてみたいと思いました。

［選んだ理由］

なぜ私がインタビューするのが山田さんでなければなかったというと、一番大きな理由は山田さんとは長い付き合いになると思うからです。二人同じ部活に所属していますし、部内でも一緒にいることが多いのでこれからもいい付き合いをしていきたいです。そのためにも深く山田さんを知っておく必要があると考えました。また山田さんは部内でも主戦力なので一緒に戦うことも増えてくると思います。実際今年の夏、大学生王座決定試合東北地区大会では団体戦メンバーとしてともに戦いました。今後はダブルスでペアを組むこともあるかもしれません。山田さんとテニスの相性が合うかどうかも全くわからないのであくまでも可能性の話になります。しかし今回のインタビューで山田さんの新しい一面に気付くことができたら新しいみちが開けるかもしれません。ダブルスでペアを組む時には、相手のより多くのことを知っておいたほうがよいペアができるので今回インタビューをすることはこれから多くの場面で役に立つことがあると思います。テニス部だからといってテニスをしている山田さんだけを知っていてもよい関係は築けないと思います。またテニスをしているときであってもまだ私の知らない山田さんがいるとおもいます。半年以上も一緒にいますがお互いが理解し合うにはまだまだ時間は必要であると感じます。今回のインタビューを有意義に使いたいです。

［インタビュー前のイメージ］

私から見て山田さんは非常に良い人だというイメージがあります。まだどのように良いかは漠然としていますが他人に好まれやすい性格であるとおもいます。その証拠に部活での山田さんの周りにはいつも人がいて笑いが絶えません。ユーモアのセンスもあるように思います。話しかけやすく人と接するのが非常に上手であると思います。私は人見知りをするので本当に最初のころはなかなか山田さんと話はできなかったのですが、それでも普通のひとと話すよりは早く打ち解けることができたと思います。これ山田さんの独特の雰囲気によるものではないかと思います。また山田さんは非常に責任感もあります。前述したとおり山田さんと今夏一緒に試合をしたのですが、その時の山田さんの試合にかけるおもいが伝わってきたときには、いつもの穏やかな山田さんからは感じ取ることができない熱い部分をみることができました。その時にひとつ山田さんに対する新しい部分を発見することができました。そういった風に山田さんの異なった一面を今回のインタビューで見ていきたいです。

３、　インタビューの計画

今回のインタビューは山田さんの都合により二回に分けて行いました。一回目はただ話をするのみで二回目は一回目の反省を生かし昼食を一緒にとりながらインタビューをしました。

４、　インタビュー結果

１、秋田と福島に対する考え

加賀美（以下 K）「なんで秋田に来たの？」
山田（以下 Y）「受かったから。最初から秋田にきたかったわけじゃないよ。」
Y「秋田ってなんもないよね。あそぶとことか。」
K「多少はあるでしょ。福島だって何もないじゃん。」
Y「あるよ。フラガール撮影したとことか。」
K「それくらいでしょ？原発があるっていうイメージしかない。秋田と同じ東北だし。」
Y「福島のほうがかなり都会だから。東北だと仙台の次位だよ。笑」

福島が嫌いなわけではないが、外にでてみたい願望があった様子。現在は秋田での生活を楽しんでいるように見えた。

２、部活の話

K「いつからテニスやってたんだっけ？」
Y「高校から硬式で中学では軟式やっていたよ。」
K「テニスの他にスポーツやってた？」
Y「ゴルフやってたよ。」

割とスポーツは好きなようだ。ゴルフをやっていたことについて私が驚いていたら少し得意げだった。

３、兄弟の話

K「兄弟いるの？」
Y「妹いるよ。」
K「仲いい？」
Y「普通じゃないかな。」

兄妹のことについて話すのは嫌ではないようだ。話し方から仲がいいという印象を受ける。

４、福島について

K「福島のどこ出身なの？」
Y「いわき市だよ。」
K「高校はどんなとこ？」
Y「磐城高校だよ。」
K「頭いいの？」
Y「結構いいよ。」
K「福島から秋田にきたら寒いんじゃない？」
Y「かなり寒いね。」
K「福島って雪どれくらい降るの？」
Y「特別寒い時だけ降るくらいだね。積もってもたいしたことない。」
K「きりたんぽ食べた？」
Y「食べたよ。結構好きだよ。」
K「福島のおいしいものって？」
K「桃とか喜多方ラーメンとかかな。」

頭がいいという事実をあまり否定していないのでそれなりに自信があるように思える。食べ物の話は結構盛り上がっていたので食にかんしては興味が強い気がする。

時間の関係でここで一回目のインタビューが終わった。その後授業で評価してもらいもっ

と話しやすい環境づくりについてかんがえた。その結果二回目は一緒に食事をしながらおこなうことにした。
二回目、日を改めて行った。

５、性格について

Ｙ「やっぱり第一印象が意外だった。」
Ｋ「最初は結構話辛かったよ。だから無愛想に見られてもしかたないって。笑」
Ｙ「ちょっと人見知りするからね。」
Ｋ「言われてみればそんな感じだね。一回仲良くなると結構話せるタイプでしょ？」
Ｙ「確かに、でも結構みんなそうじゃない？」
Ｋ「山田の場合は最初かなり話しかけづらいけど、仲良くなるのがはやい気がする。普通はもっと時間かかると思うよ。」
Ｙ「そうかな。特に自分ではそういう意識ないけどね。いいことだと思う。笑
ていうか本当にいい人だと思っている？笑　普段の態度からはそんな風に思ってる様子ないけど、授業用にいいことかいたんじゃないの？笑」
Ｋ「ちょっとね！笑　でも実際いいやつだとは思っているよ。まあ変な部分も多いけど。」

私も人見知りをするので話しかけづらかったということがあるかもしれない。一回話してしまえば慣れるというのは私たちの共通点なのかもしれない。またテニスなどの共通点があったことも助けになったように思える。

６、山田さんの責任感について

Ｙ「責任感があるっていうか、団体戦は普通みんな負けたくないっておもうでしょ。だから特別責任感があるってわけではないんじゃないかな。」
Ｋ「確かにそうだけど、いい加減なやつはいいかげんじゃん。」

あくまでも私が受けた印象だが実際に責任感はあるほうだと思う。本人は気付いていないもしくは謙遜しているような感じだった。

７、秋田の冬と今年度の冬休みについて

Ｙ「秋田って雪あって冬テニスできなくなるから不便だよね。早く春ならないかな。」
Ｋ「ずっと秋田にいるから冬はできなくて当然だと思ってるからね。福島はずっとできる？」
Ｙ「寒いけどできるよ。雪も降るけどほとんど積もらないからね。秋田は道路が白くなるから信じられなかった。」
Ｋ「当たり前だと思ってるからな。雪が降らないところはうらやましいよ。」
Ｙ「最近全然テニスしてないな。」

K「福島かえってやればよかったじゃん。帰らなかったの？」
Y「結局帰ったんだよ。京都いった帰りに。でもラケットとか秋田に置きっぱなしだったから。苦笑」
K「そういえば京都に行くって言ってたもんな。楽しかった？３人でいったんだっけ？」
Y「いや２人だよ。１人は京都まではいかなかった。」
K「２人？話すことなくならない？笑」
Y「ずっと電車とかも２人だったからさすがになくなったね。笑」
K「京都に五日もいて何をしていたの？」
Y「服見たりとかだね。年越しは清水寺でしたよ。」
K「へー。山田ってあまり実家に帰らないよね。大学来てからゴールデンウィークと今回だけでしょ？」
Y「うん。だって面倒くさいじゃん。」
K「京都に遊びに行く暇はあるのにね。笑」

とても寒がりで秋田の寒さには参っている様子だった。今年度の冬休みは非常に有意義だったようだで休みの間はほとんど出かけていたような感じだった。家に帰るのはお金と時間の関係で行きたくても行けないことが多かったようだが面倒くさいからとしていた。

８、部活の話 Part2

K「そういえば、新人戦でられないかもしれない。」
Y「なんで？」
K「実習とかぶるんだよね。」
Y「まじかぁ。それはもったいないな。ダブルスのペアとかどうなるんだろうな。１、２年生だけなんだよな。」
K「うん。だれかあまるかもね。」
Y「だれと組むことになるんだろうな。」
K「ちなみにダブルスとシングルスどっちが好きなの？」
Y「ダブルスだね。ダブルスのほうがやってて楽しいし、シングルスは疲れるから。笑」
K「いい加減だなぁ。笑」

試合に出られない私を少し気遣ってくれていた。シングルスは疲れるからと嫌だと言っているが実際は彼の協調性がみられていると思う。

５、　インタビューから浮かぶイメージ

私の持っていた山田さんのイメージから外れる部分はほとんどなかったように思えます。私が彼に持っているイメージを彼に伝えてみたが、彼はそんなことがないと思っているようでした。これは私が普段彼には真面目に話をしないので、少々恥ずかしかったようでした。冗談ばかり言っている私からそのようなことを言われることは意外だった様子でした。
私は結構、自分の考えを直線的に伝える方なのですが山田さんは非常によく受け止めて

くれていると思います。そこに私は惹かれているのと思います。今回のインタビューではその様子は浮かび上がってはきませんがインタビュー後に考えてみればそのような気がします。また私のわがままな一面も理解してくれているような気がします。これはやはりお兄ちゃんであるからとも考えられました。周りとの調和を大切にしているので来るものは拒まずといった感じではないかと考えます。しばしば恥ずかしそうにごまかすときがありましたが、これは謙遜している場合もあればちょっと隠し事をしているときもあると思います。隠し事といってもそんな大それたものではないですが親しくなってもどこか一線を引く彼なりのアプローチだと思います。あまり近すぎない距離感が彼と仲良くなれる要因でもあると思います。

以上のようなことから私は山田さんに惹かれ友人になれたのだと思います。これからも今回のイメージを大切にしてよい付き合いをしていきたいです。

6、　インタビューしてみての感想

今回のインタビューでは山田さんの意外な一面を見つけるつもりでしたが、イメージ通りすぎて全く意外ではなかったように思えます。正直、残念と言えば残念な気もしますが山田さんがそれだけ裏表のないということだと思います。インタビューをすることで必ずしも大きな変化があるわけではないとわかりました。今回のインタビューはイメージの再確認というかんじになったと思います。友人のことをここまで深く考えてみたことはなかったので非常に難しい部分が多かったです。普段はあまりにも何気なさすぎるのでいざ言葉にして表してみようと思うとうまくはできませんでした。しかし言葉にするだけで自分のなかでのその人の大切さがわかるような気がしました。

7、　日本事情Ⅱをふりかえって

今回、日本事情を受講してみて留学生と交流できたことが一番楽しかったです。考え方や意見の違いはあらゆるところに起こりうると思いました。またインタビュー（聞き書き）という方法を初めて実践してみてその難しさと利点に気付きました。普段はしないような話ができ有意義な時間をすごすことができました。今回はグループ間の交流が２グループ間でしかありませんでした。もっと多くのグループとも意見交換できればより多くのコミュニケーションができたのではないかと思います。文章を書くことが多く大変なこともあったが受講してみてよかったと思います。

タイトル：「山田さん」の魅力

グループ：5　　阿蘇裕樹

目次

1　山田さんにインタビューをする理由
1－1　どんな人か
1－2　自分にとってどんな存在か
1－3　私の考える「山田さん」
1－4　インタビューに関して
2　インタビュー
2－1　インタビューの結果
3　インタビューの結果、分かったこと
4　「日本事情Ⅱ」を振り返って

本文

1　山田さんにインタビューをする理由

私が山田さんにインタビューをしてみたかった理由は、どこか人を寄せ付けてしまうような、不思議な魅力をもっている山田さんをもっと深く知ってみたいと思ったからです。山田さんはいつも友達に囲まれており、その場の雰囲気はとても明るく楽しそうです。私は山田さんの、いつの間にか友達を引き寄せてしまい、まわりを自然に明るくさせる不思議な力の真相を、今回のインタビューで解明していきたいと思い、山田さんを選びました。

1－1　どんな人か

山田さんは前述したとおり、友達に自然と好かれるような素晴らしい人です。また勉強ができ、テニス部に所属しスポーツもこなす、いろいろ万能な方です。本当にすごいと思います。

1－2　自分にとってどんな存在か

山田さんはとても信頼でき、尊敬でき、そしてやはり大変頼りになる存在だと思います。まわりのほかの友達もそう思っていると思います。

1－3　私の考える「山田さん」

私は、山田さんはとても人との付き合い方が上手な人だと思います。山田さんはどんなタイプの性格の人とでも打ち解けあうことができる人です。たとえ初対面の人であっても、まわりの人たちが関わりづらいと思うような人であっても、山田さんであればそんなのおかまいなしだと思います。また、山田さんは頼りにされるのが大好きで、とても世話好き

だと思います。まわりに頼りにされているときは大変嬉しそうです。

１－４　インタビューに関して

頭がよく勉強ができ、スポーツもそつなくこなしている山田さんに、インタビューでは小事の他に特に、山田さんの弱点についてお話を聞いてこようと思い、インタビューにのぞみました。私にとって尊敬できるところしかもっていない山田さんにも、苦手とするものや、不得意なところなど、意外な一面が必ずあると思い、私はそうした誰もが知らない山田さんを、一つ一つじっくりお話を聞いて、いままでとは見方の違う、真新しい山田さんをどんどん発掘していきたいという気持ちでした。

また、やはり山田さんの友達を自然に引き寄せてしまう魅力についても迫ってみようと思ってインタビューしました。

２　　インタビュー

あそ　「今日はいろいろ聞かせていただきます。」
やまだ「聞かれたことは何でもしゃべってやるよ。」

とても協力してくれそうである。

A「ではまず身近なことから・・・・・・・出身県、血液型、好きなタイプの女性など教えてください！」

彼をちょっと茶化してみた。

Y「出身県は福島県、A型、好きな女性のタイプは・・・・・地球の女性です・・。」

彼は少しすべってしまった。場の空気を濁らすまいと私はすかさずフォローした。

A「じゃあユウコリンはだめっすね！彼女はコリン星出身だから」
Y「そうだね。」

お互い話しがしやすい雰囲気になったところで徐々に質問をしていく。

○山田さんの友達のでき方

A「ところで山田さんはたくさんの友達から好かれていますね！！」
Y「そうだね～。大学きてから友達どんどん増えたしね～。」
A「そこでズバリ質問！！！山田さんは、友達が自然に自分のまわりに増えていくのには、“何か山田さんなりに友達をつくろうとしたり、友達の輪を広げたりなどの努力をした”

とかいう何らかの意図があるんですか！？」
Y「そんなことはないよ。学科の人でも、テニス部の人でも、自然にみんなとしゃべりはじめたから、やっぱり今いる俺の友達は自然に、友達になった人ばかりだよ。」

やはり、まわりの友達は自然にできた友達がほとんどのようだ。

○「万能な山田さん」

A「それでは次の質問に・・・、まわりのみんなから好かれている山田さん。そして頭も良く、運動もできる山田さん。どうやったら山田さんのようになれますか！！？ぜひおしえてください！！！」
Y「俺はおまえにとってどんな存在だ？？」

少し笑いながら答えていた。

Y「頭が良いのは中学、高校で勉強がんばったし、運動できるって言ってもテニスとかやってるから基本的なことはできるし、・・・・・」

思ったよりも反応が悪い。どうやら頭が良いとか運動ができるとかは、べつにもって生まれたものではなく、勉強とか部活の練習とかしっかり頑張ってきたからできるのだ、とでも言いたそうだ。

○「山田さん」についての山田さんの主張

Y「というか、たぶんお前が思ってるほど俺は万能な人間ではないぞ。」
A「それでも俺からしたらお前は万能にみえるぞ。勉強とかいろいろ友達とか俺に教えてくれるし、体育の授業とかも普通にできてるし。」
Y「まあお前は勉強とかテキトーなところがあるから頭に関しちゃ、俺を少し見習って勉強しろよ。でも運動できるのは、やっぱりテニスくらいだよ。」
A「そうなんだ。」

私はすこしおどろいた。わたしにとって「万能な山田さん」は、山田さん自身にとってはそうでもないらしい。特に運動のほうに関しては、それほど自信は持っていないようだった。
つづけて私は言った。

A「でもすごいみんなに頼られてるし、好かれてるよな。」
Y「頼られてるのは勉強がほとんどだな。俺勉強じゃなくても、友達に頼られるのは結構好きだし。好かれてる理由はフツーにみんな友達だからじゃね？」
A「まあ、確かにそうだけど」

Y「だいたい、俺が好かれてる理由なんて自分では分かんないし、そもそも自分で俺めっちゃみんなに好かれてるよ。こんな理由で。なんてこと自分からいえないでしょ。」

彼は軽く笑いながら言っていた。

A「・・・そうだな・・」

もっともな事を言われ、私は少し考え込んでしまった。

〇苦手な事

Y「じゃあ次の質問にいってよ」
A「おう。じゃあ次の質問！山田さんの苦手なことや悩みは！！？」

少し黙っている。考えているみたいだ。

A「別に軽いことでいいぞ！」
Y「ちょっと待って。今考えてっから。」

やはり考えていた。すこし下を向いて考えている。

Y「んーーーーーーーー、エアーマンがたおせない・・・・・」
A「そんなのはどうでもいい！！」
Y「冗談だよ！！・・・ロベたなところかな・・。俺さあ、岩崎君とのインタビューでも言われたんだけど、自分の昔のことあまり自分から語らないらしいんだよね。」
A「まあ、確かにお前が自分から昔のことしゃべってるのみたことないな。」
Y「それがどうロベたと関係があるのかというと、俺どうも前から自分の昔のことに限らず、自分のことしゃべろうとすると、うまくしゃべれないみたいなんだよ。」
A「なんでだろうな。」

またちょっと軽く考える山田さん。

Y「たぶん、・・特に自分にしか分からないこと、例えば自分自身のこととかしゃべろうとするとうまく伝えられないからかな。」
A「自分のこと友達にしゃべんの、心の中のどっかで実は恥ずかしがってる部分があるんじゃない？」
Y「さあな・・・」

自分にも分らない、といったようなリアクションだった。

Y「まあ、たぶん自分のことを話すのに関しちゃあ、口べたになっちまうな。そこが悩みかな。」

少し考えて、ハッと思い出したかのように続ける。

Y「悪い。口べたになる時がまだあるわ。」
A「どんな時？」
Y「初対面の人としゃべる時。あの時は全然うまくしゃべれないわ～。」
A「そうなの？？けっこう学校始ったばかりの頃とかフツーにみんなとしゃべれてたじゃん。」
Y「・・・・・頑張ったんだよあのときは。・・」

とても照れくさそうである。

A「へ～知らなかった。なんだ、お前でも不得意な時とかあるんだな。」
Y「そりゃ、あるわ。」

だとすると、最初私やみんなが彼と知り合ったとき、彼は人一倍頑張ってみんなにしゃべりかけていたということである。先程の会話で自然に友達が増えた、と言っていたが、きっとみんなには知らない、彼の努力があったのだと思う。私は改めて彼を見直した。きっと彼のそういう所がみんなに好かれるような所の一つなのだろう。

A「それじゃあ口べたな山田さんに一つお願いがあります！！！さっそく自分に関すること何でもいいので何か一つしゃべってみてください！！！！」
Y「えぇーーめんどくさい・・。」

ちょっとした悪戯心からか、さっそく山田さんに自分から何かしゃべらせてみたくなった。

Y「あ！！そろそろ時間だな。またの機会にしゃべるわ！！」

山田さんに最後に逃げられてしまった。

２－１　　インタビューの結果
この日のインタビューでは、山田さんについて

・基本的には多くの友達は、自然にできる。
・初対面のうちは、うまく喋れないこともある。それでも頑張って自分から話しかけに行く。
・自分自身のことは、べつに話したくないというわけでもないが、うまく伝えられない。

・頼られると心地がいい。
・勉強や運動に関して努力家である。
・運動では、テニス以外にはそれほど自信がない。

ということがうかがえたと思われます。
初対面でも気軽に会話ができるという、私が考える「山田さん」は、すっかり的外れとなってしまいました。
また、インタビュー中の山田さんの様子について言うと、しっかりこちらを向いて話してくれて、私の質問にも終始落ち着いた雰囲気で答えてくれました。

3　インタビューの結果、分かったこと

私は、インタビューという形で改めて山田さんと対談してみて、山田さんが自然に友達に好かれ、自然に周りの友達を引き寄せてしまうという、とても素晴らしい魅力は、山田さんがとても素直な心の持ち主であること、頼られたいというお世話好きなところがあること、初対面で話すことが苦手となるときでも頑張ってしっかり友達と会話をしている、というこの３点のポイントにあると思います。

まず、わたしとのインタビュー中の山田さんの様子や、質問に答えようと途中考え込んでいたり、また照れていたりしたことなどから、山田さんがとても素直で人が好いということがうかがえます。また、人に頼られたいという素晴らしい性格をもっている、人と接しづらくてもちゃんと接する、など、友達としてとても素晴らしい要素をもっています。これらが、山田さんがもつ魅力の一部となっていると、私は今回のインタビューで分かりました。

また、自分を語ることがあまりない山田さんから、山田さんにも苦手なことがあるということを聞けたことは、これからも長い付き合いになりそうな私たちにとって、新たな一歩だと思います。今回のインタビューを一つの経験として、山田さんとよりよい関係が築けていけたらと思います。

4　「日本事情Ⅱ」を振り返って

この授業は留学生の方や、他学部他学科の人たちとそれぞれの友達についてという題目で、たくさんのコミュニケーションがとれ、とても楽しく素晴らしい時間とすることができたので、たいへん良かったです。

彼女は情の細やかな人

Ｇ５
李相鎮

目次

１．インタビューの相手紹介 1
２．印象的なエピソード 1
３．自分にとってどんな人ですか 2
４．コメントの答え 2
５．房美仙さんのイメージは 2
６．　房美仙さんにインタビュー 2
７．感想―「インタビューしながら感じたこと」 5
８．このクラスについて 5

１．インタビューの相手紹介

私のインタビューの相手は同じ学校の入学生の房美仙さんです。彼女は今年、二十歳になりました。
彼女は高校の時から、日本の大学に行きたいと思って日本語の塾に通いながら勉強したと言います。
そして、高校を卒業した後すぐ、日本の秋田大学に入学しました。
彼女は一年生の時には知り合いが全然なくてちょっとつらい時間を過ごしましたが、2007年の10月に来た留学生たちと仲良くなったからどんどん明るい性格になったと言いました。

私の考えでは幼い女の子がどうやって日本の大学に留学しようと決めたか本当にすごいと思いました。
そして寮に住んだ一年間、いろいろなことがあったそうです。どんなことがあったか聞いてみると
彼女はいつも笑いすぎて話しがよくできないくらいでした。
去年の留学生たちとは本当に仲良かったなあ～と思いました。
これは後でインタビューの中で話したいと思います。

２．印象的なエピソード

実は去年秋田大学に留学した先輩の中で一人は私が韓国の大学に通うとき、うちの学生会長でした。
その先輩が日本に行った後、私がその学生会長をやったので特別な関係だったと言えます。
エピソードは今年の８月、先輩が留学を終えて韓国に帰ったところでした。
房美仙さんも９月に韓国に来ましたので、「一度会って話して見たらどうだ」という先輩の話で、
会って見ようかと思ったけど、そのとき、他の約束があって会えなかったです。
房美仙さんは私と会えなかったまま、日本に戻りました。
そのあとで先輩と一緒にご飯を食べながら日本の生活について聞いてみる機会がありました。
先輩が国際電話をかけて初めて房美仙さんと話し合いました。
なんかすごく気まずかったです。正直に何の話をすればいいのかぜんぜん分かりませんでした。
「まあ、日本に行ったら、親しくなるだろう」と形式的な話をしただけで終わりました。
そして日本に来たとき、空港で待っているだろうと聞いたので到着して探して見ましたが、
見たことは携帯電話のよく見えない写真だけだったので、空港に迎いに来てくれた人の中で
彼女を探すのも大変でした。その写真の中ではちょっと太った感じでした。

迎えに来た人の中で女の子は二人でした。でも、何度も見ても二人とも日本人みたいでした。
それでみんなが集まっているところを向って「 美仙！！」と呼びました。
その時に答えた人が一人いてその人が房美仙さんでした。
それで私は先から知っていたように自然に話しました。
でも、その日は家探しと、布団購入と、ガスの連結など、いろいろ仕事があったからもう話す時間はなかったです。暗いになったからやっと終わって、留学生みんなで夕ごはん食べました。
そして、その日に家に帰るときに家が近いのを気付きました。その時からダイソの位置とか、一番安いマートなど、いろいろなことを教えてもらって今まで世話になっています。
そして、彼女は料理が上手なのでたびたび美味しい料理を作ってもらいます。家具とか必要なものもたくさんくれて本当にありがたく思っています。

３．自分にとってどんな人ですか

房美仙さんは私にとって本当に大切な人になりました。
日本に来たばかりの私が困っている時、いつも助けてくれた人です。
私も日本に来て三ヶ月もたちまして今はちょっと慣れましたので、私が助けられることがあったらなんでも助けたいです。

４．コメントの答え

「房美仙さんはこの授業を受けたことがありますか」と質問されましたが、
彼女はこの授業をG1で受けています。
「彼女は他の友たちとの関係などはどうですか」と質問されましたが
彼女はKOREAサークルの一員としていろんな場面で活躍しています。
「彼女はどうして日本の大学に進学したいと思いましたが」と質問されましたが、
中学生の時から日本に関心があったそうです。とくに日本の文化に関心が高いです。
「彼女の趣味はなんですか」と質問されましたが、
彼女は歌を歌うことが好きでたびたびカラオケに行きます。
一人で行って6時間も歌ったこともあるくらいに歌好きです。
一緒に行ったこともありますけど、とっても楽しかったです。

５．房美仙さんのイメージは

彼女は恥ずかしがりや
　最初に彼女に会ったら、ちょっと冷たい気がするかもしれませんが、
　彼女は情があって人との関係がすごくいいです。
　一応仲良くなったら自分のことより相手のことをもっと大切に考えてあげる温かい心を持っています。
かわいい女
　女の子なら誰でも人形や、アクセサリーが好きなのは当然なことですが、
　彼女の部屋にはリラックマの人形がいっぱいあります。
　歌う時にはとってもかわいいです。
怠け者
　朝寝坊することが多くて一コマの授業はつらいと言います。
大人
　彼女の優しくて大人しい性格で大人のイメージがあります。

６．　房美仙さんにインタビュー

日本で暮らしながら経験したことについてもっと詳しく取り上げたいです。

<u>最初のインタービュ</u>

Ｑ： 房美仙さん、日本にはいつ来ましたか。
Ａ： 2007年の４月です。
Ｑ： 日本に留学することに決めたきっかけはなんですか。
Ａ： 高校の二年生から日本語の勉強をしていたので、日本語で直接話して見たかったし、
一番大きな理由は文化を体験して見たかったです。その時から塾も通いました。
Ｑ： 今、日本に来て一年半くらいになりましたよね。生活しながら、
一番大変だと思ったのは何ですか。
Ａ： 力が必要だった時です。今は留学生みんなと仲良しなので、助けてもらっていますが、
来たばかりには助けてもらえる人がいなかったので力の仕事をいつも自分一人でやっていました。
その時はつらかったです。

［ちょっとくらい顔をして思いたくないことだと気付きました。］
Ｑ： 房美仙さんは留学生じゃなくて入学生ですよね。韓国から来た留学生とはどんなところが違うと思いますか。
Ａ： あんまり違っているとは思いません。ただ、私が留学生よりは日本でもっと長い時間を過ごしたので助けることができるということかな。
Ｑ： そうですね、じゃ、一ヵ月の生活費用はどのくらいですか。
Ａ： それは時々に違いますが、だいたい四万から五万円くらいかかります。
Ｑ： 国の友たちとの連絡はどんな方法でしていますか。
Ａ： インターネット電話です。無料なので楽です。
Ｑ： 最後に来たばかりの留学生たちに一言お願いします。
Ａ： 元気で過ごして日本語もだんだん伸びて記憶に残るような留学生活を送りましょう。
Ｑ： ありがとうございました。

<u>彼女が韓国に行って来た後でもう一度インタビュー</u>

Ｑ：韓国にはいつ行きましたか。
Ａ：去年の12月15日に行って29日に帰りました。
Ｑ：二週間でしたね。 どうでした。
Ａ：久しぶりに家族が集まって楽しかったです。
Ｑ：家族の話をもっと聞かせてください。
Ａ：私の家族は4人で父を母と弟と私です。
うちの家族はみんな性格が明るくていつも友たちや、親戚にすごく人気があります。
特に父が一番おもしろくて、人気があります。
弟は今、中学生ですので、思春期だというか、とにかく神経がするどいです。
Ｑ： 韓国でやったことの中で一番よかったことは何ですか。
Ａ：やっぱり家族と一緒に過ごす時間が気楽で、家族と一緒に食事をしたのが一番よかったです。
日本で食事をするのが嫌いというわけじゃなくて、家族のあたたかい情がよかったです。

「この話で美仙さんがどのくらい家族のことを大切にするのかよく分かるようになりました。」
Ｑ：それでは日本での生活についてもっとインタビューしたいですが、エピソードとか、
思い出すことがあったら聞かせてください。
Ａ：去年の留学生の人ですが、ガン・ユンテさんという人がいました。
ユンテさんがはじめの授業で名前を書くところにガン・ユンテと書きましたが、字が下手で
先生が「ユン」を「コン」で見て出席をとるときにガンコンテさんと呼んだから
別名が「ガンコンテ」になりました。

「去年の留学生の話をする時は笑顔でずっと笑いながら話して私まで気分がよくなりました。」
Ｑ：去年の留学生たちとは本当に仲良かったですよね。韓国に行った時にも会いましたか。
Ａ：はい、そうですね。デジョンに三度も行って会って楽しい時間を過ごしました。でも、
忙しい人もいてみんなとは会えなかったので、残念でした。

Q :今度の留学生たちとはどうですか。仲良しになりましたか。
A :今は近くに住んでいる留学生とはとっても親しくなりましたが、全部とはまだです。
Q :日本で暮らしながら韓国の家族に連絡はどうしますか、そしてお小遣いとかはどうしますか。
A :家との連絡はパソコンでインターネット電話でやっています。そしてお小遣いは必要な時に少しずつインターネット送金でもらっています。たまにはバイトもやっていますので。
Q :ああ、そうですか。今、円高なので生活に無理があるのではないですか。
A :もちろんありますよ。通帳にお金があっても円高で引き出せないだけですよ。

「私もその気分をよく分かっていて哀れでした。」
Q :大変ですね。私もそうですが、早く韓国の経済が回復されてほしいですね。
A :そして、今年の四月に来る留学生も大変だと思っています。あなたの言うとおり早く経済が回復されたらよかったですね。
Q :去年の留学生と今年の留学生中、どっちと過ごすのがもっと楽しいですか。
A :去年ははっきり言うとみんなが私を呼び出して私と遊んだのではなくて私が親しくなりたかったので遊びに行きましたが、今年は私の重要度が去年より高いので、正直言うと去年より、今年が気楽かなと思います。去年はハンバット大学の学生だけ遊ぶ傾向があったんですが、今年は私も入れていろいろ美味しいものを食べに行ったりもしています。
Q : 今、親しく過ごしている学生たちとはどんな関係ですか。
A : 去年は私を含めて留学生みんなが留学生会館に住んでいたので、そこで遊んだことが多かったですが、今年の留学生はみんなが寮ではなく、アパートに住む学生もいました。私ももう寮では暮らせなくなりまして、一人で寂しいのではないかと心配してたんですが、それでもアパートに住む学生たちが私の家の近くに住むことになってよかったです。私たちはファミリーと自分で決めてしょっちゅう一緒に集まって話したり、遊んだりしています。
Q : そのファミリーという集まりについてはどう思いますか。
A :それが去年よりいいということです。私たちのファミリーは各自自分の独特なキャラクターがあって一緒にいたらすごくおもしろいです。最初にはあんまり親しくなくて、ちょっと不自然な気がしましたが、すぐお互いの性格や、くせを見つけ出したりして楽しいです。
つまり、去年の学生たちはみんな個人的にはお笑い芸人のようなおもしろい人でした。そして、仲良しでした。でも、みんなよる遅くまで花札や、ゲームばかりして私が入り込むような空気ではなかったです。それに比べて今年は私と気が合う学生と一緒に過ごせてとってもいいです。

[ファミリーは私にも特別な意味がありますので、彼女にも大事なものだと思いました。]
Q :そのファミリーとのおもしろかった思い出や、エピソードはありますか。
A :え～と、たくさんありすぎて、何を言えばいいかよく分からないんですけど、こんなことがありました。みんな日本のカラオケには行ったことがないと言って私がよく行くカラオケへ連れていきました。 カラオケではフリータイムで六時間も歌いましたが、みんなはじめはどうして人が六時間も歌えるのという顔をしていましたが、結局時間が足りなくて、みんなおしい顔をしました。次からは疲れている人はカラオケボックスで寝たりしてその様子をカメラで撮ったりして楽しかったです。 自転車で三十分もかかるのに今まで、10回以上行って来て、フリータイムではなかったことは一度もありませんでした。

[ファミリーの話をしている時には去年留学生の話をする時よりももっと嬉しい顔をして見ていた私の気分もよくなりました。私もファミリーですので、よく分かる話ですけどとってもおもしろかったです。]
Q : へえ～みんなカラオケ好きですね。
A :はい、そうです。予約の曲は19曲までですが、いつも「予約がいっぱいです。」という文が出ます。みんな歌鬼です。そして、バイキングにもよく行きましたね。
Q :あ、バイキングですか。そこでは何の話がありますか。
A :家の近くにあるバイキングは1時間に1000円、2時間フリータイムに1350円です。
私たちファミリーは行くたびに今日はきっと1時間コースにしようと決心しますが、いざ食べはじめるといつのまにか2時間フリータイムコースに変更されています。
それでこの間、行った時はめっちゃくちゃ早く食べすぎて1時間コースで終わらせました。

その結果、私たちの中で一人は腹を痛みました。
Q：あ、そういえば房美仙さんの誕生日、1月の1日でしたっけ？
A：そうです。もう過ぎちゃたんですけどね。
Q：ファミリーから何かプレゼントとかはありましたか。
A：え～、それが私の誕生日は正月と同じなのでみんな「誕生日おめでとう」よりも「あけましておめでとう」と挨拶します。
今度の誕生日はファミリーと一緒に過ごすことになって期待していましたけど、
みんな円高で、辛い時だし、プレゼンドは望むこともなかったです。それでもファミリーのお姉さんが「プレゼントをあげられなくてごめん。韓国から宅配便が来るから、来るとみんなで一緒にカルビパーティーをやりましょう。」と言いました。
でも、郵便局の連休で1月2日に到着すべきだったカルビが入っている宅配便が6日に到着しました。
その中のカルビはもちろん餅といろんな食べ物が全部食べられなくなりました。
それで、カルビは残念ながら、すてられちゃったんです。

[そのカルビを捨てた人が私でした。おしかったです。]

７．感想―「インタビューしながら感じたこと」

家が近くて比較的にたくさん会えたのも長所だったと思います。
何度も会って話しながら、美仙さんは本当にあたたかい人だと思いました。
よく知らない人には冷たい人だと思われるかもしれませんが、
家族と周りの人たちに自分ができることならどんなことでも一緒にやってくれます。

最初に彼女に会った時はその年くらいの女の子と同じだろうと思いましたが、知れば知るほど
考えが深くてまるで皮をむいても新しい玉ねぎのような魅力があると気付きました。
彼女の魅力的な部分は自分の自慢をせず、他の人の話をよく聞き入れることではないかと思います。
彼女と一緒に話すと自分も知らないうちにおしゃべりになっていたのを気付きましてちょっと恥ずかしかったこともあります。二十歳になったばかりですが、考え方は私よりも大人っぽいです。そしていくら小さいことでも喜べることも彼女の魅力的な部分の一つだと思います。
私は彼女にいつも世話になっていますので少しでも返したくて買い物する時に重いものを持ってあげるとか、何か必要なことがあれば、手伝っています。
そんなに小さいことでも彼女はとっても喜びます。
大笑いになることもたくさんあって、彼女にはギャグをやる甲斐があるというか、みんなで一緒にいるともっと楽しいです。
最初にこのインタビューを誰にしようかと思った時に彼女にすべきだと思ったのもこんなところからです。

８．このクラスについて

このクラスは日本の学生とのコミュニーケションができることが一番の長所だと思います。
私がいるＧ５には留学生が私一人しかないのではじめはちょっと緊張しすぎてどんな話をすればいいのか全然分らなかったですが、ほかの生徒たちが親切に話し掛けてくれて今は大丈夫です。
でも、まだ日本語をペラペラにはしゃべられないのでもっと勉強しなければならないと思いました。
授業以外にも日本でよく使う表現とか、日本と韓国の文化の違いを分かるようになりました。
次の日本に留学しに来る大学の後輩にもこの授業を推薦したいです。

＜終わり＞

日本事情Ⅱ「多文化コミュニケーション入門」

他人の文化

医学部保健学科　作業療法学専攻

G5　原　和宏

目次

1　どうして加賀美開くんにインタビューしたいのか
1－1　加賀美開くんとの出会い
1－2　頼りになる加賀美開くん
1－3　加賀美開くんの印象的なエピソード
1－4　加賀美開くんの魅力
2　私の考える加賀美開くん
2－1　私のイメージ
3　インタビューについて
3－1　インタビューで聞きたいこと
3－2　「なぜ加賀美開くんの周りに人が集まるのか？」について
3－3　「なぜ作業療法士になりたいのか？」について
3－4　インタビュー中に気になったこと
3－5　インタビューの結果
4　結論（他人の文化について）
5　「日本事情Ⅱ」を振り返って

１　どうして加賀美開くんにインタビューしたいのか

１－１　加賀美開くんとの出会い

私が加賀美開くんと初めて出会ったのは、秋田大学の生協で企画された「ダチエル」でした。この企画は新入生が集まって友達を作ることを目的としており、そのときに話したのが最初でした。このときは、初対面と言うこともあり、あまりはなせませんでした。

その後、初めての大学での講義の日、受けるべき講義の場所がわからず困っていると加賀美開くんが優しくどこに行けばいいのかを教えてくれました。このときに、初めて加賀美開くんと普通に話せるようになり、加賀美開くんと本当の友達になれました。

１－２　頼りになる加賀美開くん

さっきも挙げたように加賀美開くんは、いつも困っている私を助けてくれる、とても頼れる存在です。それは、私に限った事だけではなく同じ作業療法学の他の一年生の間でもリーダー的な存在であり、講義の連絡をしたり、みんなをまとめたり、テスト勉強でわからないところを丁寧に教えてくれたり、いろいろと助けてくれます。

１－３　加賀美開くんの印象的なエピソード

加賀美開くんとの印象的なエピソードは、加賀美開くんとテニスをしたときのことです。このとき、私と加賀美開くんそして加賀美開くんが初対面の私の友達２人と４人でテニスをしていました。私はさすがに加賀美開くんでも初対面の人とテニスをするのは気まずくなるかと思ったのですが、加賀美開くんはすぐに２人と打ち解けてしまいました。なので、４人でたのしむことができました。このときに私は加賀美開くんが「何か」人とすぐに仲良くなるような「もの」を持っていると感じました。

１－４　加賀美開くんの魅力

私が思う加賀美開くんの魅力は、さっきも挙げた人とすぐに仲良くなってしまう「もの」だと思います。私にはこれが何なのかをつきとめるためにインタビューしたいと思いました。私や加賀美開くんが目指している作業療法士は、患者さんと直接接する仕事であり、患者さんと仲良くすることも必要とされる仕事です。そのなかで、加賀美開くんが持っている人とすぐに仲良くなる能力は、とても必要なものだと思います。

他の加賀美開くんの魅力は、いつでも、誰にでも優しく出来るところや、いつも笑顔で周りの人たちを和ませてくれることや、ときには、自分のことをネタにして笑いを取るところなどはすごいことだと思います。

２　私の考える加賀美開くん

２－１　私のイメージ

私の考える加賀美開くんという人は、まじめで、気配りが出来て、初対面の人でもすぐに仲良くできる人だと思うので、たくさんの人に頼られ、また、顔が広く、いろいろな情報を得ている人だと思います。

また、加賀美開くんが持っている人とすぐに仲良くなってしまう能力は、加賀美開くんが誰に対しても優しく、また、いつでも笑顔でいることが初対面の人でも安心させ、笑いを取れるところなどが加賀美開くんがすぐに人と仲良くなれてしまう能力のなかみだとおもいます。

３　インタビューについて

３－１　インタビューで聞きたいこと

今回のインタビューでは、「なぜ加賀美開くんの周りに人が集まるのか？」と「なぜ作業療法士をめざしているのか？」のふたつに重点をおいて実施してみました。

これは、加賀美開くんの魅力について知りたいという事と、同じ作業療法士を目指す上で作業療法士になりたいと思う理由が知りたいからでした。

３－２　「なぜ加賀美開くんの周りに人が集まるのか？」について

この質問をしたところ、加賀美開くんにそのまま聞いても「わからない」や「そんなことない」といった返答だったのですが、高校時代の興味深い話を聞くことができました。私は、このことが加賀美開くんの周りに人が集まる理由ではないかと思いました。

加賀美開くんが高校生だったとき、クラスに一人で孤立している男子がいたそうです。そのとき加賀美開くんは、その男子に話しかけ、クラスの他の人になじめるようにしてあげたそうです。

このことは、私が大学にまだ馴染めず、さらに秋田という慣れない土地で不安だった私に優しく声をかけてくれたときの事ととても似ており、あのとき私が感じた安心感が、加賀美開くんのまわりに人が集まる理由だとわかりました。どういうことかと言うと、加賀美開くんは、初めて私に話しかける時に優しい笑顔で、優しい声で、とてもラフな感じで、こちらがとても親しみやすい印象を与え、安心感を与えてくれるのです。この安心感が加賀美開くんの人を惹きつけるものだと思いました。

３－３　「なぜ作業療法士になりたいのか？」について

この質問では、加賀美開くんがとてもしっかりとした志しを持って作業療法士を目指し

ていることが分かりとても驚きました。

加賀美開くんは、中学生の頃から医療系の職業に関心を持っており、中学生のときの職場見学で病院に見学に行き、そこでいろいろな職種を見学した中で作業療法士が一番素晴らしいと感じたそうです。そう感じた理由としては、見学して来たいろいろな職種の職場の中で一番患者さんの笑顔を見ることができたからだそうです。その後は、高校の間もその目標は変わらず、地元の秋田大学に作業療法士学科があり、受験したそうです。

また、大学に入り、作業療法について学び始めたことで、加賀美開くんが考えてきた作業療法士の仕事と本当の仕事の内容は、ちょっと違いがあったそうです。それは、作業療法士の職場の範囲の広さでした。作業療法士は病院や介護施設だけでなく、公務員としてや、精神病院などもあることなどだそうです。私も中学生の頃に作業療法士という職業をしりました。また、大学に入り、自分のイメージしていた作業療法士と違いがあることをかんじていたので、加賀美開くんと似ていると感じました。

３－４　インタビュー中に気になったこと

加賀美開くんとは、前にも述べたように硬式と軟式で違いはあるものの同じテニスをしているという事で、テニスについても話した。ここで気になったことが少しあった、いつもは優しく温和な加賀美開くんが「テニスは硬式じゃなきゃつまらない」と、強く言ってきたことや、「テニスの後衛は攻めなきゃ」と、とても攻撃的な一面を見せたことである。普段話しているときには決して見られない姿だと思い、まだまだ知らないことがあると思った。

もう一つ気になったことがあった。これは加賀美開くんだけに当てはまることではないが、出身県のことについて話が変わったときである。

加賀美開くん「福島県って関東に近いから秋田より都会でしょ？」

この一言はとても残念でした。福島市から来た私にしてみれば、秋田の方が都会であり、また、以前に加賀美開くんにはこの話をしたのに覚えていてもらえなかったからです。加賀美開くんは案外人の話を流しているところがあるということがわかりました。

３－５　インタビューの結果

インタビューをしたことで加賀美開くんの周りに人が集まる理由が知ることができました。それはさっきも述べたように、人に安心感を与えるということでした。私も加賀美開くんのように人に安心感を与えられるようになりたいと思いました。そのことは、将来的に作業療法士になったときに役立つと思いました。作業療法士には患者さんにインタビューのようにして、患者さんを詳しく知る仕事があり、患者さんに安心してもらえればいろいろなこともすんなり聞けるとおもいました。

また、作業療法士という職業に対する考え方も似ているところや、自分と違うところがあり、将来どんなところで働きたいかなど、いつもはあまりまじめに作業療法士のことな

どについて話さないので、とても新鮮で、とても充実したものになり、自分自身も考えさせられる時間になったと思いました。

4　結論（他人の文化について）

今回の講義で、文化について考える中で一番身近な文化である「他人の文化」を取り上げて勉強していく中で私は、秋田に来て一番身近な人の文化を知ることが出来た。その人特有の考え方や、物の捉え方があってとてもおもしろかった。

また、その人に住む地域の考え方や物の見方の共通点も発見できて、今後の生活で生かしていくことが出来ると思った。

いつも身近にいて知っているつもりになっていたけど知らないことや新しい一面を知ることが出来た。将来作業療法士になったときにこの事を思い出して他人を尊重できるようになりたいと思った。

5　「日本事情Ⅱ」を振り返って

「日本事情Ⅱ」を受講して良かったと思うことは、友達とより仲良くなることが出来たことである。インタビューという形をとることで、今まで知らなかったことをしることができた。また、私の事も知ってもらうことが出来た。

次に、工学資源学科の人や教育文化学科の人と仲良くなることが出来た。いつも同じ保健学科の人といるので他の学科の話はとても新鮮だったしおもしろかった。

また、今まで接する機会がなかった留学生との交流はとても貴重な体験となった。韓国の人に「どうして日本人は韓国に関心が薄いのか？韓国人は日本のドラマや曲お沢山聞いたりするのに」と言われてとても困惑した。でもその通りだとも思った。

これを機会に他人だけでなく他の国にも関心をもっていきたいと思った。